



セレンディピティ

—思いもよらなかった偶然がもたらす幸運—

表題を見て、何だろう？と感じた方は多いかと思います。

この用語(セレンディピティ)を知ったきっかけは、弊社発刊の「農林金融」(10月号)の編集会議にて、弊社研究員(尾中)が論文に記載してきたことでした。

昨今、ビジネスの世界では様々なカタカナ用語が飛び交っていることもあり、大抵、一度は目や耳にした用語が多いのですが、セレンディピティは恥ずかしながら私自身初めて接した用語だったため、調べたところ表題の意味であることを知りました。普段であれば、調べてみて、意味がわかった時点で自分の中では完結するのですが、なぜかその後も自分の頭からこの用語が離れなかったので、後日、書籍・動画でもう少し調べてみることにしました。

関連する書籍・動画から、順不同に理解した内容は以下のとおりです(注1)。

- ・人は計画どおりに事を進めたいという願望をもっているが、人生には常に「予想外」という別の言葉が絡む。
- ・予想外の出来事や偶然の出会いが人生の余興や雑音ではなく、むしろ決定的な要因として私たちの人生と未来に大きな違いを生じさせる。
- ・セレンディピティとは「予想外の事態での積極的な判断がもたらした思いがけない幸運の結果」である。

・・・ということでした。何だかわかったような、わからないようなモヤモヤした感じです。偶然の積み重なりが結果として「すごい発見につながった」「顕著な成果を出した」時に用いるのが理想形だと思いますが、もっと身近に感じられないかと考え、私の半生に当てはめてイメージしてみました。

- ・自分は幼少時から走るのが得意で、中学・高校では陸上競技部に入り、6年間全う。一方で疲労から膝を痛める。かかりつけ医から「膝周りの筋肉を鍛えれば症状は緩和する。自転車はいいトレーニングになる」とアドバイスをもらう。
- ・それをきっかけに大学では自転車同好会に入会。全国各地に自転車で旅するようになり、各地の田園風景に魅了され、その田園風景の構成要素である農林水産業と深く関われる農林中央金庫に関心をもち、縁あって入庫した。
- ・最初の赴任地は大分県。自分にとっては全く縁のない場所であったが、当地

での交流を広める中、妻と出会い結婚、子供2人にも恵まれ、現在に至る。

こんな半生です。部活として陸上競技部に入ったこと、また勤め先として農林中央金庫を選んだことは自らの行動です。一方、膝を痛めたのも、最初の赴任地が大分県だったのも自分にとっては「予想外」でしたが、それら予想外の事態において自ら判断した結果が「セレンディピティなのである」と解釈すると自然と腹落ちしました。

セレンディピティとは「出会いの頻度」×「気づき」の掛け算の結果のことです(注2)。その公式にあてはめると「出会いの頻度」と「気づき」の数を増やせば、発生可能性があがることになります。「気づき」の数を増やすには一定の素養が必要ですが、「出会いの頻度」を増やすのは素養ではなく、自ら動くという行動力であると私は思っています。

弊社では社内議論を経て「業務運営方針」(2022~2030)を定めています。詳細は割愛しますが、「幅広いネットワークの構築」「充実したフィールドワークの蓄積」等を弊社にとっての基礎体力(不断の取組領域)と位置付けており、この基礎体力維持には行動力が欠かせません。

ありがたいことにJA(農協)、JF(漁協)、JForest(森組)の方々、生産者の方々、行政をはじめとした関係機関の方々から「農林中金総合研究所」を信頼いただき、弊社の調査研究活動に多大なご協力をいただいています。言い換えると、他のシンクタンクと比較して、弊社は農林水産業における「出会いの頻度」は圧倒的に多いといえます。

そのような恵まれた環境に甘えることなく、しっかりと行動力を発揮し、関係するの方々にとって、ひとつでも多くのセレンディピティをもたらすことができるよう今後も弊社一丸でつとめてまいります。並行して「気づき」の数も増やせるよう精進してまいります。

本年も引き続きのご愛顧、よろしくお願い申し上げます。

(注1) 東洋経済オンラインより

(注2) 林勝明「人見知りでもセレンディピティ」飛鳥新社 より

((株)農林中金総合研究所 代表取締役社長 高 義行・たか よしゆき)